

# Natunatuna 「観た人のもの」になる絵をめざして

## Artist

猿田 なつ奈 SARUTA Natsuna  
(natunatuna)  
筑波大学大学院修士課程体育研究科修了

## Writer

岡野 恵未子 OKANO Emiko  
筑波大学芸術専門学群  
芸術学専攻 2 年

## natunatuna

「こんにちは」「いらっしゃいませー」「久しぶりー、元気?」。筑波大学にある画材店、渡辺美術に入ると笑顔で店員の方々が迎えてくれる。とても温かい雰囲気だ。そんな渡辺美術の店員の一人である、猿田なつ奈さん。実は、猿田さんにはもう一つ名前がある。その名前は、「natunatuna」—猿田さんがイラストレーターとして仕事をするときに使う名前である。

猿田さんは大学を出て以来、イラストレーターとして精力的に活動を行っている。natunatuna という名前を名乗りだしてから今年でちょうど 10 年ほどになるそう。私たちと同じ筑波大学で学生時代を過ごした経験をもつ猿田さんが、自分の活動姿勢や作品に込めてきた思いを探ってみる。



ふとした感情を表現する

## 院生時代の大きな 2 年間

大学時代、体育専門学群で大好きな陸上競技に打ち込む一方、自主的にイラストレーションの制作を続けてきた。練習が終わった後に部屋で描いたり、先輩からもらったパソコンのソフトで制作したりしていたそう。当時、美術というものに強い興味があったわけではなかったが、学生が作ったもののよう「作った人がどのような人かを知ることができる」ような身近な作品にはとても興味があり、そのような作品を観るのが好きだったという。学生が行っている展示にもよく足を運び、面白いと感じた人には連絡をとったりしていた。しかし、「体育と芸術」という溝やコンプレックスはなかなかぬぐえず、芸術専門学群の卒業・修了制作展へは壁を感じてしまうので行けなかったそう。しかし大学院に進むと、そのコンプレックスの意識に変化が表れてきた。猿田さんは当時を振り返る。「大学院時代

が良くて、人は一人一人違うんだっていうことをすごく感じさせてくれる 2 年間だった。今までだったら仲良くなかなかだろうなっていうタイプの人と仲良くなったり。その頃芸専 (芸術専門学群の略称) の『いい作品創ってるなあ』って感じた人に連絡を取って喋った時に、作品を観てもらったらすごくほめてもらえて、『体育なのにこんな描いててすごい』って言うてくれて、『体育なのに』っていう言葉がついてても嬉しかった。その言葉がきっかけで、自分の絵を人に見せてもいいのだと考えるようになったそう。

はじめて展示を行ったのは、作品を描きためていた大学院時代。友人が水戸市でカフェを開くことになり、そこで展示を行った。そこでたくさんの人に応援してもらい、色々な人に知り合えたそう。それからは本を自費出版したり、都内のイベントで似顔絵を披露したり、友人の結婚式で似顔絵を描いたりという活動をして走り続けてきた。

## 「音楽」と「少女」

猿田さんの描くイラストレーションを眺めていると、同じテーマが何度も描かれていることに気づく。そのテーマの一つは「音楽」、もう一つは「少女」である。例えば、ハンモックに寝そべり、ラッパを片手にこちらに視線を投げかける少女。または、ヘッドホンをつけ、背中あわせに立っている少年と少女。沢山の手紙の上に体育座りをし、コーヒースを飲んでいる少女。この二つのテーマには、一見すると深い共通性は見当たらない。しかし、

これら二つには猿田さんの強い思いが反映しているのである。それは、他人が自分の絵を見たときに、その絵がその人の中に入り込み、その人のものになれば良いと望む思いである。

音楽について、猿田さんはこう語る。「自分の故郷が田舎だったから、自分がちょっとだけでも外とつながっている気がしたのが、音楽だったの。あのね、音楽というものは、自分のものにして良いんだと思っている。聴いている人は発信側からすれば受け手という形だけでも、ただ単に、人のものでは終わらないんだ。自分の中に入って来た時点で、自分のものになるんだ。自分のものにする方法は絵を描くことも一つ。その『自分のものにして良い』という感覚を意識したのが、自分の原点」

その「自分のものにして良い」という感覚を、猿田さんは自身の絵に求めている。そして、その性格を作品がもつために、少女というモチーフは大きな理由を持っているのだ。少女について、猿田さんはこう語る。「(描かれた少女たちに) 特にモデルはいない。誰が見ても、『こんな人いそう』って思えるようなものになったら良いなあと。限定しちゃうと、人が入ってくる余地がない」

猿田さんには独自の少女論がある。それは、「おじさんでも、少女の心はもっている」という考えである。「おじさんは少女に感情移入できるけど、少女はおじさんに感情移入できない。おじさんの絵を描いても、女の子が、『あ、分かるー』『このおじさん私だ』とは思わないんだよね。でも、少女を描けば、おじさんは昔好きだった人を思い出したり、おばさんは若いころを思い出したり、誰かはそのまま今の自分だと思えたりとか。少女っていうのは誰でももっている部分だと思ってる。それもあって、女の子ばかり描いている」

自分の絵が、音楽と同じように、作者である自分の所有から離れ見た人のものになってほしいと猿田さんは思っている。

猿田さんの作品はポストカードに描かれたものがかなり多くあるが、それらは画風も主題も多様である。画風の選択は

直感で行い、描きたいと感じたものをちゃんと描くという意識なのだそう。「ポストカードにはこだわりがあって、できるだけ色々な種類を、できるだけ色々な画風で。『私、これ〜』っていうものにお客さんが出会えるように」。ここにも、誰かが自分を移入できるための工夫が込められている。

## 一番身近な絵描きで

だれかが自分のものだと感じるような絵を。そのように絵を描くことは、猿田さんにとってどのような仕事なのだろうか。「なんかね、代わりに描きます! って感じ。一番身近な絵描きさんでいいやって。ある人が本当にこう思っている気持ちっていうのを一個でも形にできればなあって。あと、もしその人がこういうのを描いてほしいって言ったら、私には時間があるし、絵を描く道具もあるし、紙があって…、だから描き残せるよって」

人の気持ちを代弁する、ということとは少しずれるかもしれないが、猿田さんは音楽イベントなどのチラシを制作する仕事も数多くこなしている。自主制作の作業より楽しいのだそう。絵を観る人、手にする人の気持ちを大事にする猿田さんの姿勢と重ねると、納得である。

「依頼された仕事の方が好き!! 人の気持ちが入ってきた方が面白い。人の欲しいものを形にすることが、すごく面白い。フライヤーは、要望をきちんと表現できるようにになりたい。相手が欲しいものを描きたいし、私が描きたい画風でどうこうというよりは、『お客さんが来るように』とか『その人の気持ちが届くように』とか、そっち優先。誰にでもなれる (代弁できる) という気持ちで描いている。そして、依頼された仕事の方が評判もいい (笑)」



描かれた沢山の少女たち

## 絵と向き合っていきたい

猿田さんの話を聞いていると、本当に人間が好きなのだなあ、という印象を受ける。そんな猿田さんは、今までの、そしてこれからの自分の活動についてどう考えているのだろうか。

「とにかく人が好き。だから別に、仕事としては絵じゃなくてもいいのかなとも思う。でも、絵でもいいのかなって。そう、絵を描く役割の人が自分じゃなくていいやとも思っているけど、今は自分の絵が楽しいし、面白いから描いている。絵を描いて生きていきたいなあって腹はくくれていると思う。いつでも自分を面白がれたら良いと思うし、自分を面白がってくれる人がいるのを忘れちゃいけないと思う。自分の生き方を良いて言ってくれる人には救われている。芸専の信頼している学生さんが展示を見に来てくれた時に『多分誰よりもたくさん描いているよ』って言われたのがすごく自信になった。それぐらいの気持ちで描いていきたい。まあ、長さではないけど、描いている長さ、向き合った分っていうのが、何かには出るだろうなど」

人が好きで絵を描くことも好きで、その思いを制作にこめてきた猿田さん。その純粋で強い思いから、たくさんの作品を生み続けてきた。そしてこれからも生み続けるだろう、描いた作品一つ一つで「誰かの思い」を代弁できていることを願って。



音楽イベントの DM 作品



普段とは違う画風で描いた作品